ロコーストの悪夢は、歴史の中に留まることなく現代社会の様々な断面を侵食している。ジェレミーの不安はその被害者になると同時に、自らも加害者になるのではないかという恐れである。この二面性が最も顕著に示されるのが、第三章での彼の乱闘である。ホテルのレストランで屈強な父親が幼い息子に暴力を振るうのを目撃した彼は、自らの不幸な子供時代を重ね合わせ、激情に駆られて父親を殴り倒す。いつもの中立的立場を捨て去り、ジェレミーはこの事件を自らの過去の「清め」であり「復讐」であると力強く主張するものの、ここでも悪の境界は定かではない。男を殺しかねなかったジェレミーを我に帰らせたのは、そこに居合わせたフランス人女性の言葉「もうやめて（“Ça suffit”）」であった。それは四十三年前、ジューンが自分に飛びかかろうとする黒い犬に向かって叫んだ正にその言葉である。こうしてジェレミーの行為は黒い犬と結び付けられ、彼は黒い犬が象徴する暴力を自分の中に見出すのである。黒い犬の悪が自分自身を侵食していることに気づいたジェレミーに境界を保つ力はなく、彼は伝記の結末においてジューンのヴィジョンが自らの語りを支配するに任せるのである。

黒い犬の最も恐ろしい点は、その悪を特定できないという事実である。ゲシュタポ、村人の悪意ある噂、非人間界の獣の敵意、そしてこの平和なフランスの片田舎に発信機を持ちこむ連合軍の軍事作戦に間接的ながら加担していたジューンとバーナードの二人にさえも、悪を見出すことは可能なのである。更には、二匹の飢えた黒い犬がジューンに牙をむき、攻撃態勢を取っていたのは確かであっても、ペンナイフを手に初めに突進したのはジューンであること、ナイフが突き刺さった瞬間、巨大な黒い犬がまるで子犬のような「哀れな鳴き声」を立てたことは、ジェレミーと父親の乱闘と同様に、果たして加害者はどちらなのかという点すら曖昧なものとする。序章でジェレミーが解釈を拒んだこの事件は、その曖昧の度を更に深めて読者へと伝達される。そして境界の消滅、悪の遍在という小説のテーマは、「語られる者」ジューンに、そして黒い犬の悪に侵食される語り手ジェレミーによって体現され、増幅されているのである。

ディケンズ『骨董屋』における ゴシックとグロテスク

甲斐清高

十九世紀英国において、中世という時代に対する意識は非常に雑然としたものであった。十八世紀半ばから十九世紀後半にかけて、英国ではゴシック・リバイバルと呼ばれる現象があったが、そこには中世に対する雑多な意識が反映されている。ゴシック・リバイバルは主に建築に関して見られた動向であるが、中世を連想させるものに対する指向全体を指して考えられることが多い。当初のゴシック趣味の根底には、中世封建制時代への憧れと、ピクチュアレスクの美学に基づく廃墟への関心があった。古典主義への反発とも取られるゴシック復興の流行は、奔放な、そして不健全なまでもの想像力を解き放ち、さらに、その非現実的側面はグロテスクなものへと近づいていった。これは当時のゴシック・ロマンスの流行と密接な関係をもっていると考えられる。しかし、建築家A・W・N・ピュージンに代表されるようなヴィクトリア

朝のいわゆる知的なゴシック復興運動は、当時の産業社会を糾弾し、中世封建主義の社会的調和を理想とする社会改革の必要性を提唱していた。こうしてゴシック建築の宗教的、倫理的意義を重要視したわけである。

チャールズ・ディケンズはピュージンと同時代人であり、彼が小説『骨董屋』を執筆していたときには、すでにゴシック主義者たちの宗教的・倫理的・政治的意識が強くなりはじめていた。しかし、このゴシック観が必ずしも当時の主流であったわけではなく、一般の人々の間では、初期ゴシック・リバイバルに見られたグロテスクなものへの好奇心などが色濃く残っていた。ディケンズ自身も決して熱心なゴシック主義者ではなく、そのゴシック観には一貫性がない。しかし却ってそのために、彼が小説の中にゴシック的要素を取り入れるとき、当時の様々なゴシック観に巻き込まれたのは当然だろう。実際、彼の小説にはゴシック的要素がしばしば見出せる。特に『骨董屋』は、骨董屋という好古趣味の設定、主人公の少女ネルが旅の最後に訪れて死を迎えるゴシック風の古い教会、さらにはゴシック・ロマンスの作中人物あるいは中世の悪魔に譬えられる悪人クウィルプといった具合に、ディケンズの作品の中で最もゴシック的要素に富んだ小説であると言える。そこで、本発表では『骨董屋』におけるゴシック性の意義について考察した。

『骨董屋』は統一性に欠け、分裂した小説であることがしばしば指摘される。この物語の軸となるものは、主人公ネルと彼女の周囲との対比という極めて曖昧なものだけであり、この対比は幼く無垢な少女と、彼女が出会う醜く悪意をもった存在との間で成り立っている。その基準にあるのが、小説冒頭で提示されるグロテスクな骨董品に囲まれた幼い少女ネルというイメージである。確かに、骨董品が後にクウィルプに代表されるグロテスクな人物や事物に姿を変えることによって、その対比が保たれているという意味で、全体的な統一が図られていると言えるかもしれない。しかし、実際のところ主人公が祖父とともにロンドンから逃亡の旅に出発したあと、作中で最もグロテスクな存在クウィルプはロンドンに残され、ほとんど主人公たちと接点をもたなくなる。ここから物語はネルの旅とロンドンの生活とに徹底的に分裂する。

この分裂した二つの物語のそれぞれが、当時のゴシック観の複合的な様相を示していると見ることができるだろう。ネルが辿り着く村のゴシック的な建造物は、独特の宗教観を表わし、彼女の死を神聖で感傷的なものにする背景となっている。つまり、ヴィクトリア朝ゴシック主義者たちの間に見られた理想主義的側面を反映していると言えるだろう。他方ロンドンでは、クウィルプを筆頭にグロテスクな人物たちが独自のダイナミックな生活を続ける。ここではゴシック・リバイバル初期のゴシック観に近い性格が見られ、ネルを中心とした世界とは全く異なる世界観が示されている。このように考えると、『骨董屋』におけるゴシック観は理想主義とグロテスクに二分化し、その分裂が物語の分裂そのものと対応していると言えるかもしれない。

ただし、『骨董屋』に見られるゴシック観にはそのように単純化できない部分がある。ネルの世界にあるゴシック建造物が理想主義的傾向をもっているとは言え、作者はヴィクトリア朝ゴシック主義者のように中世を理想的社会と見なしているわけではない。作中のゴシック建造物に漂う神聖で感傷的な雰囲気は、肉体的な現実とは別の次元で表現されていて、ゴシック建造物そのものに

ついて言えば、社会的調和を連想させるようなことはなく、荒廃・風化といった特徴が強調されている。それは現実を超越した時間を示唆するに過ぎず、新しい封建主義社会の基礎という様相は全く見られない。

ゴシック建造物が感傷的なネルの死の背景として理想化され、グロテスクな要素を排除する傾向を持っているのは確かであるが、実際はここにもグロテスクな要素が垣間見られる。ただし、ネルの周囲で示されるグロテスクな要素は、クウィルプたちのグロテスクとは違った性格をもっている。ネルが引き寄せられていくゴシック建造物は、荒廃の過程を自らに刻み込んでいるがゆえに、生と死の両方を連想させる。このアンビヴァレントな状態はグロテスク芸術の重要な主題の一つである。その意味で、荒廃の物質的なイメージが強調されるとき、ゴシック建造物のグロテスクな様相が前景化されていると言える。そしてネル自身、幼く美しい姿をしている一方で、死の願望に囚われており、生と死を併せもった性格を備えているために、グロテスクなものへと近づいていくと言うこともできるだろう。

確かにネルはグロテスクなものの潜在的脅威に怯えているが、その恐怖は死への恐怖ではなくて、生に対する不安である。ある意味で、ネルの存在は純粋すぎて、不浄に満ちた現実生活とは相容れない。そして彼女の現実生活に対する不安が、グロテスクなものとして表現されているという面もある。このように『骨董屋』には、ネル自身を含んだ生と死の間を揺れ動くグロテスクと彼女の脅威となる現実生活の変容としてのグロテスクという二種類のグロテスクが見られる。

また、現実生活のグロテスクな側面は、ネルにとっての脅威であるが、そこに身を置く人々にとっては、肉体性を謳歌する陽気な表現形式となり得る。この小説の半分、あるいはそれ以上は、ディケンズ初期の作品に特徴的な喜劇性に溢れており、ネルの去ったロンドンでは、喜劇的作中人物たちがグロテスクな姿と言動で陽気な世界を作り上げている。物語が進むにつれ、ネルの周囲には笑いとは相容れない死を巡る言説が支配的になり、最後の村のゴシック建造物はその厳粛な死を巡る言説の中で可能なグロテスクを表現する。しかしディケンズはそれに飽き足らず、ゴシックの喚起するグロテスクの陽気な可能性を、ネルと離れた世界で表現していると言えるかもしれない。

この小説におけるゴシック、そしてゴシックの重要な一要素のグロテスクの表現は、当時のゴシック観と同様に複雑で矛盾に満ちたものである。ゴシックは、ヴィクトリア朝の過去と現在、そして生と死に関する多様な意識が反映される場であり、ディケンズはゴシックの表現を通して、様々な効果を生み出したと考えられる。『骨董屋』は顕著に断片的な小説であるが、その断片性ゆえに、当時の様々な意識を、その矛盾を抱えたまま反映していると言えるのではないだろうか。

宋代家訓研究 ――葉夢得の場合――

緒方賢一

大唐帝国（六一八～九〇七）の崩壊にともない没落した貴族に替わって、宋代（九六〇～一二七九）には士大夫という新たな階級が出現した。士大夫とは科挙に合格した官吏であり、試験とい